

ユニバーングローバル 2000年



うろこアンソロジー 二〇〇〇年版 目次

ねずみ猫	か	3
惰性	こめ	6
電動ポンプに吊られた片脚		タケイリエ
湯浴み	谷田竹至	15
言の葉の裏に（金丸榊一さんの死）		谷元益男
手風琴	海埜今日子	20
陽の埋葬	田中宏輔	23
ヴァレリー	堀めぐみ	25
滑空する動物たち* -----	アナーキー、狂気の極限へ	青木栄瞳
夜の鳩	足立和夫	37
河原の歌声	Kaoki	39
トキヲ	みー	42
血のつらら	清水鱗造	44
机と椅子のある庭	関富士子	47
共生	桐田真輔	50
約束	須永紀子	53
ミュージズの伝言	片桐怜	56
雨の手紙	山岡広幸	60

ねずみ猫

か

俺を呼ぶSさんの声

それにTさんの声が続く

なのに俺は押し黙って

橋の下に隠れていた

二人の声は川に沿うて遠のき

やがて秋の風に消えて行く

二人の声に土手を駆け上がり

たとえば頭にベレー帽

片手にステッキ姿で

やあと挨拶していれば

詩人らしくて

誰も俺が猫などとは気がつかなかったろうに

そして

あれは詩ですなといわれて

いやあーなどと

頭に手をやって

内心のヒゲを押し隠そうと

顔の筋肉を必死でひっばっていただろう

でもいつか機会があれば

人間になって

SさんとTさんとを

行きつけのコーヒーショップ*に誘って

(*いつもはソーセージの残りを貰いに行っているのだけど)

新しく作った詩をテーブルの上に差し出して

どうでしょうかと
二人の顔を覗いてみたい

惰性

こめ

うつろに 目は泳いで

惰性を引きずっている 睡魔が蝕む脳と体

ときに ものすごく くだらない 暇つぶしの時間

中途半端なタイムラグ

何かを始めるほどに 続く 時間は 無い

『けじめ』なんて必要無いつて考えで生きてきたから
気分削がれて さあ、再開だ！ なんてき・・・

ベスト・コンディションは 常に始めの1回に限る
あとは 付き合いたいなもんだ。

こんな人生 飽きっぽい人生

仕事も惰性 単調さに だらける姿勢

思いきった行動って なんだったっけか

親の糧ながらも 自由が生きてた頃の夢

今は独り身 生活かけて 管理されてる数値上の世界

スポーツ・カー乗り回して

女の尻 追っかけまわして

ズボンの裾 引きずって

キマってると思ってる 馬鹿なヤローども情性

ブランドものに溺れて

下手な化粧 塗りたくって

臭い香水の オーラに包まれた

注目の分別すら つかない 腐ったメスども情性

こんな下らない話に付き合ってくれてる

とりあえず モニターを直視して

ホントに自分にとって 必要な時間って 思ってる？

あなたの今の 人生も惰性

時間の流れは あまりにも緩やかに感じられて

振り返れば 千年の惰性を刻む

それも人生 そして歴史

こんなこと考えたりしてさ

なんだか 本当に惰性 惰性

ダ
セ
エ。

電動ポンプに吊られた片脚

タケイリ工

水銀灯は うすら寒いほどに冷たく

タール色のアスファルトは てらてらと光り

両脚の膜は 膝まで落とされて

工場の鉄壁の中へ 押しこまれる

発光する街を引き摺って

高架の上を 電車が走る

鈍い速度に合わせて目の前に

張り巡らされた 金網を踏みつける

車窓を追いかける 右手は空を求めながら

辺りには メッキの匂いが立ちこめて

シッターの隙間から 煙のように吐き出し

交錯する管を 幾つも通り過ぎ錆びた水は

昼夜と問わず 下へ下へとおちていく

電動ポンプの音が 耳元でささやく場所にて

金網伝いを 通り過ぎていく電車を 見ていた

群青の空の中に 月が低く掲げられて

あたしはうっとり と 片脚を上げたまま 見ていた

湯浴み

谷田竹至

湯浴みしているおんなのまたのあいだから
くろいすじが流れ落ちた

おれはそのなまこのようなものを手にとり

膝のうえに載せ弄んだ

おんなは恥じらいも見せず

黒いものを流しつづけ

湯は

まっくろになった

あさ

はやくのできごとだ

おれは

いそぎあしで仕事へと向かう

往来のにんげんたちに向かつて

おおい

と呼び掛けるのだが

一向に返事がない

おんなはまだ

くろくなつたぬるま湯を浴びている

おれはたまらなくなつて

いしをぶつけた

言の葉の裏に（金丸榊一さんの死）

谷元益男

昨年の暮

静かで草樹の芯まで冷える日

あなたから便りが届いた

病は書かず いつもの温か味のある

文の中にひとつ酒と煙草を

絶つたと書いてあつた

あれほど好きな酒を——と思い

書かれていない病の気配を

離れた空の一角に覚えた

それから半年も経たない内に

いまをめぐって

旅立って行った金丸さん

だいぶんと早足で 好きだった

酒も再びのもうとせず

静かな柔かい若葉の裏に

あるいは あなたが言う

「ぎょう」の「日」があるその裏に
ついに

ぼくは告別式の後

離陸した機内から

その体を残して欲しいと思いつつも

あなたが焼かれ

一筋の煙となって昇るのを

見た気がした

顔をおおう透明な手の中に

透明な涙を一杯流した

だが あなたは

優しい言葉を口にしながら

言の葉の裏から見守っている？

これからが榊一さん

酒を飲み 詩を食べる時間

ですヨ

少し小さい盃と 一筋の

ひかりのもとで

手風琴

海埜今日子

あるいは、よりそう帰り道。はらんだ鞆の、影のぶれる。少女のうらで、交差する、瞳のそそぐ、ひとり、ふたり。見とれていたの、びたりとくつつく、公園はすきまをかすめて暮れなずむ。

水たまりを、すくいました。かはたれ時に、影はやましい。赤玉ポオトをね、正月だけ飲ませてくれたの。飛沫たつ、ほそい喉から、影をつかむ。ふたり、ひとり。足元で、あまいブドウを噛んでみる。

いない母。赤いマンマをたべていた、父は泥のついた新聞を、少女のなかに見つけるだろう。食卓をわたる、箸のぬくもる。女のいそぐ、ネオンにそって夜がつたう。

ひらひらの、影のまぎれた方角から。ありえぬ鍵盤が耳をすませます。街にたぐられ、あかい、音色、縫い目をほどこし、みあげる明かり。少女はゆれながら、ねむるだろう。父の寝息がふたつに折れる。

息ヲシナイノハ、簡単ダト、コノ子ハ言ツタ。毒薬ノ作り方ヲ教工テクレタ。忘れていた芝居のともる、あれは手風琴、ともいうのだよ。所在のない錠剤が、少女の瓶にたばねられる。脈拍がふるえなのまま、帰ってくる。

いない父が、影をおす。ゆるやかな幻灯のまわる、真昼だった。ひとつ、ふたつ、折れない指が、母をこぼす。鞆の、とまらぬはやさ、ひらかれる、ふいごのきしみ。少女は音だけを知っていた。

そそがれた夜。漏斗のような公園はやさしい。とじゆく穴、はさんでは、わらう、ひとり、たくさん。ひたはしる女をぬりこめ、鍵盤

は、かわいた抱擁をかなでるだろう。つぎあわされた、さんにんの、
ひらたい影が、足から、はなれた。

陽の埋葬

田中宏輔

——羽根があれば天使になるの？

そうだよ。

でも、いまは、毀れてるんだ。

——その腕に抱えてるのが翼なんだね。

そう、抱いて、あたためてるんだよ。

つめたくなつて、死にかけてるからね。

——でも、ぼく、そのままの、きみがいい。

そのままの、ぼくって？

——優し気な、ただの、少年だよ。

そして、天使は、腕をひろげて

もうひとりの、自分の姿を、抱きしめました。

ヴァレリー

堀めぐみ

君が欲しがってる 500 円玉に

どれほどの意味があるわけ？

自分で勝手に放置した「失恋」に

どれほどの価値があるわけ？

月が出てるから星は見えないぜ

ヴァレリーが屋根の上で歌ってる

夜は白んでる

彼女、案外いろんな経験してるぜ

ヴァレリーはコーヒーに入れた

あのクスリでキまつてる

ヴァレリーが笑うなら

笑ってみようかな、とか思ってた

ボブ・ブルックマイヤーのバルブさばきに

どれほどの歌心があるの？

あの猫たちはもうすぐ眠っちまう

ヴァレリーがまだ屋根の上で歌ってる

君が行きたがってるさいはての地に

どれほどの意味があるわけ？

自分で勝手に設定した「正解」に

どれほどの価値があるわけ？

泣き顔のあなたを殺してしまいたい

形式的なテュツティに

どれほどの迫力があるのさ？

猫が泣きやんじまった
ヴァレリーはいつものように
時計を見る

歌いたいだけ歌ったんだね
世界の歌をすべて歌ったのかな
ヴァレリーが眠ったから
夜が明けたことにしよう

滑空する動物たち*
————— アナーキー、狂気の極限へ

青木栄瞳

無制限のギリアム宇宙

(映画作家が自身を語る『テリー・ギリアム』**目次より引用あり)

僕はこれから何をしていくのか、わからなかった。

僕は突然、アニメーターになった。

何か悪いことをしては試してみる

僕は、宣教師になろうと思った

心奪われたキューブリック映画『突撃』

僕はみんなとは逆の方向に行く

長髪であるだけで殴られた時代

テレビアニメに進出

「パイソン」は信じられないくらいきつい仕事

BBCは、僕の扱い方がわからなかった

ブリュッゲル絵画のような〈中世〉を映画で描きたい。
絶望的なきにインスピレーションが湧く。

僕は、ゲリラ・フィルム・メイカー

ブリュッゲルのユーモアを理解してほしい

編集者との対立、予算の問題

僕はローテクが好きだ

魔法のようにつながった『パンデッドQ』の編集

大失敗だった試写会

洗練されたマンガ的スタイルを求めて

魔女狩りから着想した、現実と夢の平行・ワールド

『未来世紀ブラジル』

「大失敗だ」と言われた狂気の映画

『バロン』

幻想に生きる男とパラノイアを恐れる女

カメオ出演したデ・ニーロの異色さ

発電所の冷却塔を拷問室に

試写会のたびに台詞を変える

あつという間にできたストーリー・ボード

この映画は完成できないかもしれない

悪夢のスペイン・ロケ

ベニヤ板で作った「月」の建物

過度に大げさなバロックの世界を描く

僕は自分自身を見失った監督だ

どの記事も「大失敗」と書きたてた

もう映画なんて作りたくない

魂もない、金属質の場所を探す

センチメンタルな題材の扱い方

ストーリー・ポートを使わず撮る

セントラル・ステーションをダンス・スクールに

いい監督は、いつキレるかがポイント

ニューヨークが驚いたNYの風景

膿をもった現代のおとぎ話

情報とノイズまみれの中でいかに人生の選択をするか。

『12モンキーズ』

「企画進行地獄」にハマる

CM、CD-ROMを作る

撮りなおしなし、猛スピードで撮影

僕の映画がわかる「知的な観客」

誰も思いつけないような世界を創りたい

―――水かきや皮膜を上手に使うヤモリやカエルたちの“飛行術”

パンサートビガエル

パラダイストビヘビ

クールトビヤモリ

オオアカムササビ

マレーヒヨケザル

ツノトビトカゲ

.....

アメリカン・ドリームは決して実現しない。
『ラスベガスをやっつける』

滑空する動物たち

パンサートビガエル

パラダイストビヘビ

クールトビヤモリ

フジモトマキ *

スルガマサキ *

アオキエイメ *

オオアカムササビ

マレーヒヨケザル

ツノトビトカゲ

……

BBCは僕たちの扱い方がわからなかった

アナーキー、狂気の極限へ

パンサートビガエル

パラダイストビヘビ

クールトビヤモリ

オオアカムササビ

マレーヒヨケザル

ツノトビトカゲ

……

うーん、さわりたい!!

最大積載量 5000kg

- * 雑誌「ナショナルジオグラフィック」日本語版(2月号より引用あり)
- * フィルム・アート社『テリー・ギリアム』編(イアン・クリステイ)

2000.10.29 2000年11月10日ハウル・ザ・バー(ラ・ボワット・ノワール)「how1

poetry books + SPITTOON 1冊目記念ライブ」のために創作)

夜の鳩

足立和夫

無数のひび割れた青空の目のなかから
たえまなく降りてくる風の淀むところに
ふるぼけた段ボール箱が積まれている

いつしか鳩たちがすみはじめた

傘もささず

棒のような日日が
確かに過ぎていく

若わかしく発芽する確信が

すりへっっていく

知ることもなく

感じることもない孤独

箱のなかの夜たち

朝 謎のような舗石に足をつき

空の割れ目に戻れないわけに

首を傾げる

鳩の不用意な生涯は

あなたでもあり

わたしでもある

河原の歌声

Kaoki

男が河原で仰向けになって倒れ
目を見開いたまま今朝死んでいたという
駆けつけた救急隊員がプーンと酒の匂いを嗅いだ
死因は急性アルコール中毒だったとか

男は板切れとダンボール紙を集めて
河原の橋の下に小屋を作り

ここ数年寝泊まりしていたらしい
そしてつい数日前にこんなことがあったという

小屋で夕食の煮炊きをしていた男は

目の前の川を男の子が流れて行くのに気がついた

男の子は男に向かって

声にならない叫び声をあげたという

男は間髪を入れず

まもっていたボロ服を脱ぎ捨て

川に飛び込んで

似合わぬ抜き手を切って男の子に近づく

無事子供を岸に引き上げた男は

河原の草むらに腹ばいになって大きく肩を上下していたそうだ

でも生まれて初めてかもしれない

満面の笑みを顔に浮かべていたという

子供の父親が高級酒の一升瓶を抱えて

河原を訪れたのが昨日

河原の近所の住民はその晩

楽しそうに大声で歌う男の声を聞いたという

「人生は捨てたものじゃない」(*)

というのがその一節だったというが

誰も確認する人はいない

*堀内孝雄「坂道」より (TOSHIBA EMI LTD)

トキヲ

みー

五反田駅を降りると北は山の手、南は雑の街

目黒川に沿い少し歩く

そして南へ約10分ほどで環6との交差点

そこを東にちよつと行くと私鉄・大崎広小路駅の
いつも見上げた急な階段

角の肉屋を右に廻り石畳の坂道へ

日の高いうちは八百屋のおやつさん

どんつくどんつく…と太鼓を打ち鳴す「南無妙…」

そして近所に有る立正大学の学生たち

とつくに日の落ちた時間には蛍光街灯の下

くたびれ果てたまばらな人影

左のクリーニング屋の角

狭い石階段のどんづまりに私は住んでいた

丸く白いガラスシエード

白熱灯の燈るアパートの玄関先

ガラスの引き戸を開け

静かに階段を上る

部屋に入り窓を開けるとぎわめく車、脈打つ電車の音

風に運ばれ身に染み渡る鼓動

血のつらら

清水鱗造

なんということもないが

血のつらら

ということが浮かぶ

そういうことが

アイデアになるとしたら

おぞましいもするし

いけないことかと思う

しかし血のつらら

赤いチヨコレートでもないし

冷たい凍った血なのだ

開国してください

とペリーが言う

減るもんじゃなし

なに そのちよんまげ？

手に入れた音声で

北陸

ということもあるかもしれない

北は雪があつて

とも思うけれど

北陸っていう図柄が妥当だ

それにしても

血のつららでも

いい天気で海はのたりのたり
起きぬけの煎茶のにおい

机と椅子のある庭

関 富士子

ファインダーをのぞいているときは気づかなかった。全体は翳っているヤブコウジの西側だけ光があたって、艶を含んだ赤い実の一つにピントを合わせるのに気を取られていた。

焼きあがった写真を見ると、くつきり浮いた一粒の実のかげから、奥へ進むように小道が続いていて、行きどまりの空き地に何かが置いてある。小学校で使ったような小さな木の机と椅子。

辺りは庭木が茂って雨ざらしなのに、ぼやけているせいか、数十年前の教室から運ばれて、たった今、そこへ置かれたばかりのようだ。

椅子は、横木の二本ついた低い背もたれと、四角なみじかい四本の脚の造りで、そこに座っていた少年のことをたしかに覚えている。

窮屈なお下がりの学生服の両肩が緊張していて、まっすぐに伸びたきやしゃな背中の上に、バリカンで刈り上げた細長いぼんのくぼの二本の筋だけ太く張っている。その首筋全体が紅潮していて、彼が激しい感情にじっと耐えていることがわかる。

教室ではいつもだれかが突然わけもなく侮辱された。それが自分ではなかったことに安堵しながら、わたしたちはいつせいにうなだれてそのときが過ぎるのを待っていた。どの机の下でも、急速に伸びてしまった足がねじれて折れ曲がっていた。

少年もいつだつて口ごたえをせず、どんな言葉も思いつかないというように俯いているのに、なぜか抑えようもなく首の付け根まで一気に赤らんでしまう。す

ると、いらだって震える細い指示棒が、いつも彼の肩に振り下ろされるのだ。

写真にぼんやり見えている古びた机と椅子には、もうだれも座っていない。彼はいったいいつ、立ち上がってわたしたちに背を向けたまま教室を出ていったのだろう。

いいえ、わたしはうなだれた目をそっと上げてそれを見たように思う。学生服の袖からぶかっこうに突き出した長い腕を伸ばして、椅子の背もたれをつかみ、脚をはめこむように机にきっちり収めて、彼は大またに出でいった。そして、机と椅子をその庭に置き去りにしたのだ。

(小池昌代個人詩誌『音響家族』14掲載2000.11.15)

共生

桐田真輔

アフリカのある種のアカシアは
内部が空洞になった瘤を持っていて
そこに蟻たちが住みつく
瘤の内壁は彼ら格好の食料なのだ
かわりに蟻たちは幹や葉に群がる
あらゆる昆虫を追い散らすという
蟻はもちろん動物までは追えない
草食獣のためにアカシアは
甘い味にする莢を用意している
どこか遠くの草原で

種子混じりの糞をしてくれるように

それでも届く範囲の葉を食べ尽くす

どん欲なキリンのせいだ

アカシアはどんどん成長したという

それにつれてキリンの首もどんどんと

生き物の生のフォルムには

沢山の意味がこめられているのに

意味がひとつの境界を越えてしまうと

私たちには見えなくなってしまう

共生という言葉の秘密は

まだ解き明かされたことがなくて

届かない高みのアカシアの葉のように

今日もアフリカの風にかがやいている

約束

須永紀子

〈月のようできてください〉と男は言った

わたしは心底うれしく

ただそこにいて

まわりを明るませればいいのかと思ったけれど

そのうえに

心をいくつにもくだいて

捧げるようにというのだった

理不尽な気がしないでもなかったが

男のことは胸に温かく灯った

何を持ってしても

それを消すことはできないだろう

白い衣を着て上座につき

わたしは心をくださいた

男が満足している間

とつきに破片のいくつかを握りしめる

穫り入れの季節がやってきて

わたしは畑に降りていった

風が髪をくしけずり

手足を雨水が洗う日々

これがほんとうの暮らしだと思った

泥色の身体。

おっとり微笑している暇もなく

男はもうわたしを眺めない

深い泥の眠り。

畑にも茅屋の上にも

月の光がやわらかくそそいでいる

静かな雨の降る朝

わたしは外に出て

とっておいた破片を道行く人に配る

誰かが手にして初めて光るものだから

それを知って男は激怒する

わたしは追われ

濡れた地面に転がって

やがて溶けて消えるだろう

それは嫌だとわたしは思う

新しい心をくぐり差し出せば

男はまたうっとり眺めてくれるだろうか

それでも赦さないと言うのなら

宙に浮かんでもよかった

白い光になってあまねく地上に降りそそぐ

月のよう
でいてほ
しいと
男は言
ったの
だ

ミューズの伝言

片桐 怜

迂回し隠されている神経が片隅の白い雲のヴェールにまで
張りめぐらされたような冬のある朝

覚醒めさせられてしまった胡桃の内部の四分五裂の

喜びだけを指の爪先に残しておき

ミモザの黄の花の方へ時の迫間に

静かに異性となる物の怪としてそっと忍ばせて

胚んでいる空の色の緊張をほぐし (古代貝紫の色に

籠絡させるには

パースペクティブの複雑系になる

以前ずっとそうだったように

位階秩序の市場に運ばれていって

苛酷にへし折られた夥しい牛の
骨を横断的に超えて

いく趣しくない現在は

無意識の廃家に杳として眠る

誠実な木綿豆腐の人柄を

乾ききつた間接光に照らされ (エコーとなって

いとおしく舞い踊る

微細すぎる塵の数にまで

孤独な木菟を雅語で微分化しつつ

やさしい眼をした羽根のある

ふわふわした見えな

仔猫の危機感を残し

あえていくつもの分身となった場所で

隠語となる疲れ切った後ろ姿を思い思いに待つて

片手あるいは両手で

手招きだけを飽きずに繰り返し

この朝できたての新鮮な眼や耳で

視たり聴いたりするような

無垢なアルペジオの質感にまで

努力しなければ（したいから

身も心も合わせ味噌で水曜日の襖を空しくして

地理から揺らめいて起こる地震みたいな

不安定な哀しみのためにも

皮膚の表の網目模様の皺からも素直になつて

全面似非鏡貼りの部屋に引き籠り

床一面に既に冷たくなつた紙吹雪状の紙の上に

腹這いになつて

ミューズからのそこはかたなく香り立つ

女文字を一つ一つ

吐息にまでも取り憑かれながら蜜柑の汁で

書記しては（小さな生命へ

禁制の寒い風を五臓に吹き入れ続けるために

世界という名の窓をさらに大きく汚泥の胸に開け
もう一つ隣の世界へとよろめき落ち

二の足を踏んで

封印の解けぬあの終わりなき言葉を

口にしえない唇が少し荒れて (この影の冬の

修辞色のカーテンのかかった

百舌の啼く路頭と露頭とにあつて

あたかも嘘つきみたい

真つ赤にまたは白々しく立ち迷っている

雨の手紙

山岡広幸

ふかい色でしか
書きとめられない
ゆるやかな
気持ちもあつて
雨ににじんだ
きみの色 そつと
指さきでたしかめる
しみこむくらい
伝わるように
追いかけて
ただ 信じれば

地図にもなるから
傘もささずに
たどる道の行方には
きみの姿が
うつる気がした